

「付録」上野学園日本音楽資料室蔵「年代不詳三首断簡」について

小著「隆達節歌謡」の基礎的研究」刊行以後に管見に入った新出の「隆達節歌謡」断簡に上野学園日本音楽資料室蔵の三首（第一首目は末尾のみ）五行の断簡がある。この断簡には神田道判の「堺住隆達（小）哥好士（印）」なる極め書きが記された極札が添えられている。極札の裏には「乙酉二」なる年記も記されており、道判の生没年から判断すると、宝永二年（一七〇五）の鑑定ということになる。これは道判の三十歳前後に遂行された仕事であった。「隆達節歌謡」断簡の鑑定には多く門人系神田氏がかかわっていることは、改めて注意してよいであろう。これまでに管見に入っただけでも、「年代不詳四首断簡（手鑑『毫海』所収）」、「年代不詳四首断簡（兵庫県某家蔵古筆貼交屏風所収）」、「年代不詳二首断簡（兼築信行氏蔵、もと手鑑『温故帖』所収）」、「年代不詳二首断簡（田中登氏蔵）」の四例があり、この断簡の出現によって五例目となる。

この断簡所収の三首には本文詞章の右傍に、墨譜による節付けが施されており、第三首目に続く部分にも墨譜の一部が見えるところからすれば、本来この後にも歌が続けて記されていたことが知られる。また、その墨譜は各歌の末尾二音に右下さがりの特徴が見られる典型的な「隆達節歌謡（草歌）」の譜となっている。三首は所収歌から「隆達節歌謡（草歌）」であることが確認できる。一方、この三首には「隆達節歌謡」に多く見られる各歌頭部の「一」が記されていない。大きさは縦二五・〇糎×横一三・二糎。次に翻刻を掲げることとする。翻刻に際しては、歌を一行書きに改め、各歌の頭部に歌番号を新たに付し、墨譜の息継ぎの印が施されている部分に読点を補

う。各歌の墨譜はこれを省略する。なお、 は詞章の欠落部分を示すが、ここでは「年代不詳三百首本」によつて補つておく。

〔翻刻〕

1 なくはわれ、泪のぬしはそなたよ

2 人からは、たをやかにして、なよ竹の、おるにおられぬ、心つよやの

3 風の吹候、なよ竹の、なひきかほして、おれこゝろもな

前述したように、この三首はいずれも「隆達節歌謡（草歌）」に属する歌謡である。「隆達節歌謡（草歌）」の各歌は和歌様の部立に分類できるが、この三首は恋の部の歌である。この三首がすべて見える歌本は「文禄二年九月江川甚左衛門尉宛百首本」、「年代不詳三百首本」、「年代不詳六十五首本」の三種が挙げられるが、このうち配列までが一致する歌本は唯一「年代不詳三百首本」となる。すなわち、その二六六番歌から二六八番歌に該当するが、さらに注目すべきは両者が仮名遣い、及び漢字と仮名の当て方も含めて、表記がまったく一致する点である。特に第一首目は先の三種の歌本以外にも、「慶長八年九月六十五首本」、「年代不詳百十七首本」の二種の歌本に採られる歌謡であるが、これら五例のうち、この断簡と同様の末尾「そなたよ」とするのは、「慶長八年九月六十五首本」と「年代不詳三百首本」のみである。ちなみに、「文禄二年九月江川甚左衛門尉宛百首本」は「そなたぞ」、「年代不詳百十七首本」と「年代不詳六十五首本」は「そなた」となっている。以上の点から、本断簡と「年代不詳三百首本」の密接な関係が浮き彫りにされよう。

あとかき

本書のうち本文、諸本索引(附・諸本配列一覧)、「付録」の作成、執筆については小野恭靖が単独で作業に当たった。一方、本書の心臓部とも称すべき総索引については、編者小野恭靖の全責任のもと、大阪教育大学教養学科日本・アジア言語文化コースの日本文学第一ゼミ、通称小野ゼミの三期にわたるゼミ生と小野の作業分担によって成った。そもそも、この総索引は平成五年九月に編者が『大阪教育大学紀要(第一部門)』第四十二巻第一号に「隆達節歌謡」の全歌集を発表したところから出発している。翌年二月、当時ゼミに入りたての三回生であった第四期生の協力を得て、品詞分解の作業に入った。以後、授業の合間である夏休みと春休みをこの作業に当て、第五期生とともに一語一語カードを採り、第六期生とともに五十音順に配列し清書した。まさに手作業の連続であった。コンピュータ全盛の時代にあつて、手作業を貫くことはゼミ生の結束に大きな力となった。このように、平成九年三月卒業の第六期生まで都合十五名のゼミ生の献身的な助力の結果、遂にここに完成をみたものである。人の世の宿命として、ゼミのメンバーは年々歳々移行行くものであるが、先輩から後輩へ、そして卒業生から在校生へと引き継がれたバトンは、今確実にひとつのゴールテープを切ったのである。指導教官でもある編者の力量不足のため、まだまだ未熟な成果であることは十二分に承知している。いわば小さなゼミのささやかな成果に過ぎないことは言を俟たない。しかし、それでもひとつの形として世に問うことができたことは、歴代のゼミ生とともに大きな喜びとするものであり、大阪教育大学に確かに小野ゼミが存在したことを証す記念碑としての意味はここに遺憾

なく示すことができたと自負している。以下、作成に携わった歴代ゼミ生の氏名を各期毎五十音順に掲出しておく。

〔第四期生〕 河原（現、窪田）聡美、木村幸広、竹村朋、林由佳子、森弓

〔第五期生〕 伊東由記、大野初美、鏑昌彦、土佐夏、馬場智子

〔第六期生〕 荒木美和、稲山智子、佐伯みずほ、芝起史、真辺リカ

なお、第四期生の木村幸広君は卒業後、引き続き大学院に進学したが、本書の完成に至るまでもっと多くの協力を惜しまなかった。また、第七期生以下の後輩ゼミ生のうち、井上智絵、長田栄、山下順子の諸君には逆引きの確認作業において助力を得ることができた。この間、木村君や第六期生以下のメンバーを中心に平成八年度日本歌謡学会の秋季大会の会場校を担当したことも、本書の完成とともに忘れ難い思い出となっている。

「隆達節歌謡」は編者のライフワークとも言えるもので、前著『「隆達節歌謡」の基礎的研究』に引き続いて笠間書院のお世話になった。そして、第一論文集『中世歌謡の文学的研究』とあわせて中世歌謡三部作を出版することも叶った。笠間書院の池田つや子社長、編集部の大久保康雄氏ならびに橋本編集長をはじめとする編集部の方々にはどんなに感謝の言葉を並べても足りない気持ちである。

平成九年十一月

小野恭靖